

『夏目漱石』より

先生の思い出（抄）

森田草平

•

目次

先生と門下	五
先生と私	二六
漱石文法	三六
漱石の語学	四六
漱石の墓その他	四七
師弟の情誼	五七
漱石と寺田博士	七六
漱石と生田長江	九三
誰が一番愛されていたか	一〇四

【底本】 森田草平 『夏目漱石』 (筑摩叢書)

先生と門下

私は今昂奮している。先生が亡くなられてから殆ど絶間なしに人と応接していたので、悲しいということもまだよく解らない。最初は——こんな事云えば、唐突と滑稽の感を誘致するかも知れないが——雪隠へ這入った時、やっと涙が差含まれる位のものであった。この一兩日はよく夜半に眼を覚ます。そしてたまたまなく淋しくなる。昼間はまだ先生のお宅へさえ行けば、いつでも先生に会われるような気がしている。こんな慌しい心持でいる時、先生について語るのは何だか悪いような気がしないでもない。が、それにも拘らず、『太陽』の依嘱に応じて、ここに先生について筆を執ろうと決心したのは、先生の亡くなられた九日の夜、私が

新聞記者の応接係をして——それも口吃して弁の訥な私が自ら進んでなつた訳ではない、恰度記者諸君の押懸けた時、私がその場に居合せたから押付けられた迄である——記者の問われるままに答えたところ、ああいう場合に有り勝ちなこととして、私の云おうとしたことかかなり多く誤まり伝えられた。私はそれに対して責任を感じない訳には行かない。で、最近の機会に於てそれを是正して置きたいという欲望が私自身にある。それとも一つは私自身よりも適当な人が若し何人も書かないならば、そして誰かが書かなければならぬとすれば、せめて私が書くということがよりよい事であろうと信じたからである。

先生の一生、若しくは一生の事業について語ることは、私の今の問題ではない。それは、今の私には出来ない、出来てもしたくない。私は主として先生と先生の門下生との間の事情について語

ろうとする。

先生の門下生——と云つていいか、とにかく先生の門に出入して教えを受けた青年の数多かつたことは当代の異数として差支えないと思う。そして、世間では先生のことを文学上の教えを垂れる以外に、よく門弟子の世話をする人、世話好きの人として噂をするようである。実際、先生はよく世話をした人であつた。が、所謂おせっかいな、世話好きでは断じてなかつた。寧ろ差出がましく他人の事情に立ち入ることは嫌いであつた。嫌いではあつたが、又人が困るのを見ては打捨うつつちやつて通り過ぎられない人でもあつた。人の窮を見て救うということは、自ら犠牲を払うことである。自ら犠牲を払うことは、先生自身の言葉に従えば、非常に苦痛である——尤も、こういう場合本人の言葉を何処まで信じていいか解らないけれども、とにかく先生はそう云つていられた。そして、

私自身もそれを信じようとしている。が、犠牲を払うことを苦痛に感ずるのは、いよいよそれを払うまでで、払ってしまったから、はすぐにそれを忘れる人であった。他人に金を恵んで置いてから、いつまでもそれをおぼえているような人ではなかった。これは先生の修養からも来ていようが、大部分は持つて生まれた性癖であつたらしい。とにかく、先生は努力なくしてそれを忘れることの出来る人であつた。これを見ても、世俗の所謂世話好き、若しくは親分気質の人として先生を見る説は撤回して貰いたい。親分気質というものは、子分を扶持して置いて、それを土台にして自ら利しようとする気味がある。意識的にはなくとも、少くとも意識下にはある。先生は門下生によつて何一つ利せられたことはない。

先生の葬式が十二日に済んだ明くる日、一人の雲水が玄関へ訪ねて来た。聞いて見ると、それは七年前に先生が胃腸病院にいら

れる頃一度訪ねて来た青年だそうな。親が破産した揚句、坊主になれと遺言して死んだ。処が、青年は坊主よりも小説家になりた
い、だから弟子にしてくれと云うのだ。先生は文学者としての成
功の困難を説いて、それよりも親の遺言に従って、大きな寺へで
も這入って修業したらよかろうというので、越前の永平寺まで行
くだけの旅費をくれた。其青年は先生の言葉通りに永平寺へ行っ
て修業した。修業中は親兄弟と雖も音信をせぬ規定なので、今迄
先生へ手紙も差上げなかつた。が、今度長老（？）の位を受けて
遠州の秋葉山へ変るについて、遠州へ来てから始めて先生の御病
気の話聞いた。で、生前に一度お目に懸かりたいと思つて、早
速秋葉山を出発したが、雲水の身では汽車に乗ることも許されて
いない。夜を日に継いで歩いて来て、今やっと到着したというの
である。先生の霊前で読経焼香することを許されたいと云つて、

お線香と蠟燭とを持って来て、読経して帰った。三十五日までは市内の各寺に寝泊りして、毎日来て読経したいと云った。そして、その言葉の如く、今でも毎日来ている。

とにかく、先生はよく人の面倒を見た人であった。そして死んでからでも、よく人を泣かせる人であった。ここに挙げたような話はまだ他にいくらでもある。が、こんな意味で世話にならない迄も、会う程の者に一種の懐しみを抱かせる人であった。懐しみを抱かせるだけのゆとりと暖かみのある人であった。

木曜会——そんな会の名がある訳ではないが、木曜日の面会日に先生の書齋へ集まって来る若い学生と先生との間に、議論風発、めいめい勝手なことを云い合つて、夜の闌たくるを知らなかつたのは殆ど毎週のようにであった。先生は大学は嫌いであつたけれども、学生は好きであつた。そして、若い者にも云うだけのことは云わ

せる人であつた。自分の主義主張とか乃至気分とか、傾向とかいうものに嵌つたことでなければ云わせないのが、通例先輩なるものの弊である。従つて若い者の方でも、どうしてもそれに迎合して行く傾きがある。先生はそれは嫌いであつた。迎合されることが嫌いなだけに、先生の方でも若い者の氣に喰わん所はびしびし遣附けられた。びしびし頭から遣られながら、やはり先生と話をしている時が一番のんびりした。のんびりして思うことが十分に云えるのである。これが先生の門下に多くの学生の集まつた最大原因であらうと思われる。先生の作を読んで、先生の前へ出ると、大抵の人が皆悪く云つた。悪く云わなければ濟まないような氣がして悪く云うのである。そういう傾向は木曜会の初期、先生の創作に一番油の乗つた時代に於て、最も烈しかつた。三十九年の夏、私が先生から頂いた手紙の中にも、「昨宵の猫ウツクに対する皆の非難

は多数決だから仕方がないとして、知己を後世に待つ外ない。今日は春陽堂から督促に会って暑い最中にうんうん言いながら、筆を走らせている。これは君の気に入りそうなものだ。君にでも気に入らなければ気に入るものはあるまい。(草枕を書いていられたのである。)漱石虚名を擁して、毎日知己を後作に待つようでは憫然びんぜんなり」というような意味のことが書いてある。此手紙を讀み返して見ても、その当時の木曜会の光景が彷彿として眼うかに泛んで来る。

先生の講演の旨かったことは遍く世人の知るところである。が、座談は一層旨かった。旨いと云っては失礼かも知れないが、一層尽きない味があるのである。私は学校時代に哲学の初歩を教わった時、所謂ディアレクティク・メソードということを学んだ。これは何でも他人と談話を交え、若しくは自分自身と談話を交え

ている間に、それに依つて真理を発見する方法だということである。哲学者が思索するということは、彼自身と談話を交えたり討論したりすることである。初期の哲学者は大抵この対話の形式で彼自身の哲学を発表した。プラトンの「対話」ダイアログなぞ引合いに出して来ると、先生はいいとしても、私どもが少しえらくなり過ぎるよう^{おこ}で烏漭がましいが、とにかく先生は生まれながらのダイアレクシヤンであつた。

先生が座談に長ずると共に、又機智縦横の人であつたことも有名な話である。理路井然りるせいぜんたる談話の間に、時々天来の。ユーモアやキツトを挿入する。それが胡椒の役目をして、一層談話を活躍させると共に、座談をそのまま活字にして置きたいと思ふことも度々であつた。或夜赤木桁平君が先生に対して、例によつて四辺に鳴り響くような侃々かんかん顎々がくがくの議論を吹ッ懸けていたところ、先生

が一向それを承認しないのを見て、「そんな事を言われるようじや先生も近頃た籬がが緩んで来たんでしよう」と云った。先生即座に応じて曰く、「馬鹿言うな、俺は昔から籬なぞ箴はめていない」と。一座いっしょ洪笑して、赤木君もそれなり黙ってしまった。序ながら、赤木君が先生を指して籬が緩んだなぞと云ったのは、一時の云い間違ちがい若しくは見当違いであらねばならぬ。先生位永く文壇に馳ち駆くして、先生位籬の緩まない人は珍しい。文壇に珍しいばかりでなく、他の学者、政治家、宗教家等、あらゆる社会を通じて稀に見る人と云わなければならぬ。先生に対してもっと他の人間になつて欲しい、もっと他流の作をして欲しいというような注文は生前にもあつたようだ。が、先生一流の人生観や芸術に於ては、近來益々緊張して、いよいよ冴え渡つて来たようである。これは私人の私見ではない。心ある人々の一様に認めていた所である。

上來述べ來つたような先生の性格なり、思想の徑路なりが「則天去私」という一句に暗示せられたような思想に到着することは、蓋し自然の數であろう。亡くなられる二三箇月前から、先生はよくこの「私」ということを問題にしていられた。私は夏の間も手前にかまけて、木曜会にも伺うことが稀であつた。が、偶に伺う時は、いつでもこの「私」が問題にされていた。最初は「私」なるものの範圍が曖昧で少しずつ動くようにも思われたが、木曜日毎にだんだんそれが引締つて行つて、終いには牢固たる一つの思想体系を形造るように見えた。が、正直に云えば、先生のこの思想は十分私には解らなかつた。自分で解らないことを——併しこれが先生の最後の頭腦を支配していたことは確かであつたので——新聞記者諸君にしゃべつたから、さまざまな誤解を生じた。それは私の責任である。で、先生のこの思想を詳細に説明する役

は、私よりももつと適当な人に譲って置きたい。で、ここにはただ新聞の誤伝を是正する範囲に於て、又後の説明者の邪魔をしない範囲に於て、私の思う所を述べて置きたい。

先生に従えば、私ども若い者の書く物には凡て「私」がある。自分の「私」を以て他の「私」を説服しようとするから相手の悦服しよう筈がない。「私」を捨てて「神」と同じ心持になつてこそ、始めて相手の誤りを承認させることも出来るのである。そして、この「私」を捨てることは、誰にも出来ていない。論文にも勿論「私」があるが、小説にもある。ひとり日本の文壇ばかりでなく、西洋にもある。イブセンやストリンデルヒは「私」の出ている隊長だが、トルストイやドストイェフスキにも出ている。先生はトルストイの作の自然性をゴッドのネーチュアと迄激賞していたが、やはりトルストイにもまだ神になり切れない所があると

云うのだ。即ち作中の人物が人物自らの意志によって動かないで、作者の意志によって無理に動かされている所がある。そこに作者の「私」が出ている。そこへ行くと、シェークスピアなどは、自分が天才だとも、自分の作が後世に残るとも考えていた訳ではない。ただ自分が脚本を書けば、客が来る。客が来て金が儲かるから自分の職業だと思つて書く。先生の眼から見れば、自分の職業だと思つて作をすることは、自分がえらいと思つて作をするよりも、「私」のないだけそれだけ尊いものになつていたらしい。で、シェークスピアにはトルストイに見るような「私」が出ていない。作中の人物は皆人物自らの意志によって動いている。即ち作者としてシェークスピアはトルストイよりも一層神に近いことになる。ここに到ると、先生の説は先生の人生観から芸術上の技巧論に迄亙っているのである。『明暗』に於ても、先生は世間がどう見る

かは別問題として、先生自らは毫も「私」を出さない、作中の人物は人物自らの意志によつて、神の摂理に従つて動いているもののように書きあらわしたいと、折に触れて云つていられた。そして、そうあらんことを予期していられたようである。

芸術上の問題ばかりでない。先生の坐臥常住にもこの用意を怠られなかつたようだ。最終の木曜日に——即ち十一月十六日の夜——私は或友人と一緒に先生を訪れた。其時友人は近頃自分の友人で或華族の令嬢と結婚したものがあつた。それに対してお祝物を贈ろうとするが、先方の家と釣合う程の物を贈ることは自分の財政が許さない。許しても苦痛である。いつそ贈ることを止めにしよるかとも考えたが、それも何だか気が済まない。こんな詰らない世俗的の習慣にも、自分は倫理上の苦痛を感じさせられる。それがいやだというような意味のことを云つていた。それに対して先

生は、それはまだ「私」を去ることが出来ないからだ。お祝いなぞ贈らないで、御馳走にだけなりに行つて、平気で済ましてられるようになるといい。自分は他の文士と比較して割合に好い報酬を獲ている。それは不都合だと云つて咎める者があるかも知れない。仮にそういう者が出て来たとしても、自分は気に懸けないでいられるつもりだ。同時に又多勢ある娘の一人が自分の前へ出て来てお叩頭をした。ふと顔を挙げたのを見ると、片眼が潰れてゐる。それを見ても、自分はああそうかと云つたまま、心を動かさずにいられるような境地に入ったとは云わないが、そういう境地に入りたいとは始終心懸けているというような意味のことを云つていられた。私がこの話を新聞記者に向つて繰返した時、最後に居残つた或記者は私に反問して曰く、「失礼ですが、ここのお嬢さんでお眼の悪い方はどなたですか」と。私は驚愕措く所を知

らなかつた。そして、飛んだ事を話したものだと言ひ悔いた。新聞記者諸君に向つてこんな話をしたのは、實際私の粗忽である。併し私はその時自分の心に實際感じていたことの外に、何事も話すことが出来なかつた。私が自分を二重に使ひ分けして、あの時あの場合新聞記者に向つて話すに応わしいようなことを話すことが出来なかつたのは、偏えに宥恕を乞う外ない。——私はここに繰返して置く、先生のお嬢さんに眼の悪い方は一人もない。あれは譬である。

私は最終の木曜日に、最後まで居残つて先生と話すことが出来たのは、私が一生の幸福と思ふ所である。平生なら頭からがみが見遣られるところだが、あの夜はどうした風の吹き廻しか、大變お手和らかで、大いに受けがよかつた。不思議に思つて帰つて来たが、次の木曜日に行つて見ると、先生は急病で一切面会謝絶だ

ということである。それから十七八日にして、先生は到頭帰らぬ旅に立たれた。私は先生が吐血されたと聞いて、すごすご玄関から引返す時、先生が前の週に大変優しかったことを想い起して、担ぐ訳ではないが、どういものか不吉の感に打たれた。その後も医者から容態の報告を聞いて、理性の上では多少安心しないでもなかったが、感情では少しも不安の念が去らなかつた。不意に來る暗示はいつも悪かつた——こんな事を発表するのは今が始めてだけれども、いつも不吉な暗示にばかり打たれた。そして、私の不安は到頭適中した——

よく訊かれることだが、先生には遺言というものは全然なかつたようである。先生が生前の覚悟から云つても、そんな必要はなかつたらしい。病中も医者から容態を訊かれるたびに、それにうけこた応答えをされたのを外にしては、何事も云われなかつたようだ。

若しそれ先生の存生中最後に云われた意味のありそうな言葉と云えば、次のようなものだ――

亡くなられる当日、九日の朝、お子さん方を寢間へ連れて行つた時、先生は末の男の子二人の顔を見て、何にも云わずにいつと笑われたそうなの。それから十二になる末の女の子を連れて行つた時、女の子だけに、先生の窶やつれた顔を見るや否や、声を揚げて、わアわア泣き出した。傍たしなにいた奥さんは、「泣くんじやない、泣くんじやない」と云つて窘たしなめられたそうなの。それが先生の耳に通じたのか、先生は弱こわねい声音で、「もう泣いてもいいんだよ」と云われたそうである。これは如何にも先生らしい言葉ではないか。先生らしいと云う外に、何とも形容することは出来ない。「もう」の一語が利いている、よく利いている。まことに先生らしい悲しい言葉である。

先生の葬儀の翌日、先生を慕って、遠州の秋葉山から徒歩で遣つて来たという雲水は、こういう場合にありがちな偽坊主であつたことが、後に到つて判明した。それは、先生の歿後間もなく長逝された有島武郎氏の先考の葬儀の際にも、同じような雲水が同家へ遣つて来て、同じような口実の下に、毎日読経を上げて、時分時にはたまにお齋に就くこともあるが、何等の報酬をも要求しない。強いて僅かばかりの報謝を取らせると、それを貰つて帰る位のものである。別にひどく悪い奴とも思われないが、同じような手口で愁傷して

いる家族を欺こうとするのは怪しいというので、『太陽』に載つた私のこの文章を見た有島武郎氏から、わざわざ手紙で注意してくれられた。その後或会合の席上で、武郎氏の令弟生馬氏に出会

った際にも、同氏からその話を聞かされて苦笑したことである。実際の所は、私はその雲水には一度も会っていない、ただ夏目家の家族の人達からその話を聞いたばかりだが、話の持つて行き方が巧過ぎる点から推しても、今思えば、最初から怪しい坊主であった。で、こういう風に考えると、先生の最後の言葉だと云われる「もう泣いてもいいんだよ」も、先生自身はそう深い意味で云われたのでない。或いは、先生としては、ただ「泣いてもいいんだよ」と云われたのが、愁傷している家族の耳には、「もう泣いてもいい」と云われたように聞取れたんだとも考えれば考えられないことはない。それが自然主義的な物の見方である。が、私の気持から云えば、どうもそうは考えたくない。やはり先生の最後の言葉は「もう泣いてもいいんだよ」であったとして置きたい。そして、それでいいのだと私は信じている次第である。

月四日附記)

(昭和十七年五

先生と私

先生が初めて創作に手を付けられた前後から、さまざまな人が先生の周囲に集まって来た。その頃先生の門に走った者の中には鈴木三重吉君がいた、小宮豊隆君がいた、かく云う私もいた。これらの人々は皆先生の人となりを慕い、先生の中に自己を見出して、有頂天になってその門に出入したものだ。中にも豊隆子の如きは、先生の中に自己を見出したと云うよりは、先生によって初めて自己を造られたと云った方がいいかも知れない。つまり先生から生れたような男である。三重吉は先生とは大分違っていた。一寸見では何処に先生と相通ずる所があるとも思われない。それにも拘らず、彼は先生の持つていられる一面を極めて濃厚に代

表していた。では、私自身はどうか。正直に云えば、私はどうも先生の中に自己を見出したとは云いきれない。先生の持つていられた善いもの、先生の長所というようなものを、私自身も持つていたとは云いたくも云われない。趣味も傾向も違っていた。どちらかと云えば、所謂門下生の間にあつても、私一人は異分子であつた。異分子を以て遇せられていた。ただそんな異分子でも包括せられた所に、先生の偉大もあれば、私が先生から離れ得なかつた理由もある。

で、そんな風だから、木曜会の席上でも、最初のうち私は多く沈黙を守っていた。三重吉や豊隆子が先生の宅を我家のように振舞つてる間に、私一人は先生の側に小さくなつてかしまつていた。が、先生の前で黙っている代りには、うちへ帰つて手紙を書く。一つは少しでも先生に認められたいという客気に駆られたこ

とは云う迄もないが、一つは此方から先生に打突^{ぶつ}かつて行つて、小さな自己でも砥礪^{しれい}したいという欲望があつたからである。先生はそれに対してきつと懇切な返辞をくれられたものだ。で、よい氣になつて又手紙を書く。『書簡集』に就いて見ても、その頃は私が一番先生に向つて議論を吹掛けたらしい返辞を貰つてるようだ。何だか故人に対して濟まないような、同時に又有難い氣がする。が、その間にはだんだん増長して、先生の前でも幼稚な氣焰を挙げるようになった。一方木曜会も、最初はただ來客の多い所から面会日を木曜の晩に定められたというに過ぎなかつたが、だんだん話が弾むようになって、一時私どもが先生の前で勝手な熱を吹く討論会の性質を帯んで來た。

一体、先生は若い者を相手にいくらでも話をする人であつたが、たやすく若い者に同じられるようなことはなかつた。場合によつ

ては、私どもの云うことには事毎に反対せられた。余りそれが烈しいので、「どうも先生は反対するために反対せられるような傾向がある」と、抗議を申込んだことがある。すると先生は、「僕は決して反対するために反対するとうような、旋毛曲りでも、依怙地いこじな人間でもない。ただ君等のような若い者と一緒になつてしゃべっていたら、どんな事になるかも知れないと思うから、わざと君等を牽制するような反対説を立てるんだ」と云われた。私はその頃学校で始めて哲学概論を教わっていたから、「じゃ、先生はヘーゲルのディアレクチック・メソッドを実行していられるんですね」と云ったら、先生は擽くまつたいような顔をして、「おれはヘーゲルは知らない」と云われた。まったく生嚙りの知つたかぶりは擽くまつたいものに相違ない。が、先生の門下生に対する態度はやつぱりディアレクチックシヤンのそれであつた。中にも、私は先

生のアンチセーシス反対対当にかかって、いつも小酷く遣られたものだ。先生の座談に長じていられたことは人も知る。ただ如何にその所謂反対当を立てられることの素早いか、又その間に先生一流の機智の閃くかを例証するために、一つ二つ先生と私との間に起った問答を掲げて置きたい。

ちようじ恰度、私が或事情のために一週間程先生の家に厄介になつていた当時のことであつた。或日の夕方私は先生と一緒にお湯へ這入つた。その頃私は人生を無暗に長たらしい、耐え難いものに考えさせられていたから、卒然として先生に向つて、「先生は死んでからもう一度人間の世に生れ返さして遣ると云われたら、甘んじて生れ代たずつていらつしやるか」と訊ねて見た。一つは二人とも生れたままの裸体だから、そんな妙な事を想いついたものらしい。先生は突然この変挺来な質問を受けて、不思議そうに私の顔を見

ていられたが、やがて臍の辺りをじやぶじやぶ洗いながら、「僕はこの胃囊さえもつと健康に生みつけてくれたら、甘んじて一度この世へ出て来るね」と答えられた。私は啞然として云う所を知らなかった。又先生は有名な子福者である。そこから想いついた訳でもないが、或時私が何かの序に、「人間も子供を産まない間は自分の生命は自分の掌に握っている。先祖のアミーバから伝わった、この何千年続いたか知れない、又今後何万年続くか知れない生命の流れでも、自分の意志一つでどうにでも断つことが出来る。が、一度これを子供に譲ったら、もう永久に自分の意志の支配権外にある。その子が又子を産み孫を産んで、今後何万年続くか知れない。何万年続いた揚句、自分の子孫が世界覆滅の日に逢うかも知れない。それでも自分は手を拱して見ている外ない。思えば恐ろしいことである」と云ったら、先生は言下に「馬鹿を

云つちや行けない。そんな事を気にした日には、自分のひった糞の行末だつて心配しなければならぬ。あれが菜葉から糞、糞から又菜葉というように、何にどう変化して、今後何万年つづくか知れない。思えば恐ろしいことである」と答えて、並居る面々の度胆を抜かれた。この二つの例は、別段私が小酷くこつこつどやられているという訳でもないが、それでも私の空想的な感傷主義センチメンタリズムに対して、わざわざ先生の現実主義リアリズムを強調されたものとも見られる。かくの如くにして、私の先生から受けた影響は、私の持っている僅かなものでも、それを助長し、はぐくみ育てて貰つたというよりは、ともすればあらぬ方へ逸れ勝ちな私の性情を、先生によつて矯め直されたと云つた方がいい。少くとも私には始終そう見えた。私がかともかく人生と社会とを正当に理解し、曲りなりに世の中に立って行かれるようになったのは、偏に先生のお蔭である。実

際先生がなかつたら、私は今頃どうなっていたか分らない。

が、それは精神生活の上よりも、実生活に就いて一層適切に云われるかも知れない。尤も実生活と云った処で物質上のことを意味するのではない。その方では私よりもっと先生に厄介を掛けた連中がいくらもある。では何か。他でもない、『煤烟』のことである。当時さまざまな反対かあつたにも拘らず、あの作を朝日新聞の紙上に発表することが出来たのは、偏えに先生の庇蔭ひいんによると云わなければならぬ。その後私は先生の下に同新聞の文芸欄でも働いた。私が全然事務の才を欠くにも拘らず、これも先生の庇蔭によつて、同文芸欄は先生の修善寺の大患以後まで持続することが出来た。想うに、先生が始めて創作に筆を執られてから修善寺の大患までというもの、最も露骨に云うことを許されるならば、先生は奥さんの先生でもなければ、天下の漱石でもなかつた。

単に弟子どもの漱石であった、弟子どもの所有であった。少くとも弟子どもはそのつもりでいた。こんな

事を云つたら、先生の方では大いに異議があるかも知れない。

「おれはおれだ、お前達のために生きていたんじゃない」位はきつと云われるに違いない。が、先生の歿後、それに乗じて云う訳ではないが、あの当時の先生を「弟子どもの先生」と宣言して、私は内に省みて毫も疾しくないように思う。但しそれは大患迄である。大患以後の先生は、急に弟子どもの手を離れて、天下の漱石となられた。社会の所有に帰した、同時に又奥さんの手にも帰つて行かれた。尤も、これは単に私どもの感じから云うばかりである。が、それ以後の先生に就いては、私どもが一番よく知っていると云われない。じゃ、誰が知ってるか。恐らく先生を知る者は先生一人であつたかも知れない。それからずっと、私は比較

的先生から離れた生活をしていた。そして、大正五年十二月九日、先生はとうとう最後の大病に罹って不帰の客となられた。が、病臥の一週間前十一月十六日の夜、最後の木曜会にゆくりなくも参会して、一夕を先生の温容に接しながら、心ゆくばかりの清談に過ぎしたのは、私に取って何物にも代え難い記念となった。先生はその夜を最後として再び訪客に接しられなかつた。私はその夜のことを想う毎に、再び先生を自己の所有にしたような気がする——尤も、私一人の感じに過ぎないけれど。

これを要するに、私は所謂門下生の中でも一番よく先生を知っていたとは云われない、一番多く先生から可愛がられたとは尚更云われない。が、一番深く先生に迷惑を掛けたことだけは確かである。迷惑を掛けたということは一向自慢にはならない。ただそういう自覚を持った時、私は一番先生に接近するような気がする。

漱石文法

全集の校正を引請けた時、私は二三の同人と共に一わたり先生
の作品に目を通して、先ず「漱石文法」判定の必要を切に感じた。
それは次のような理由による。

第一は邦語の文章が漢字と仮名とを併用する結果、どれ位迄送
り仮名を附けるかが極めて曖昧である。例えば、肩をそびやかす
というような動詞にしてからが、聳という漢字を当てることにし
て、さて送り仮名はやから出すべきか、かから出すべきか、それ
ともこの動詞の語尾として働くすだけにして置くべきか。勿論か
から出すのは意味がない。が、この動詞は本来そびゆから来てい
るので、漢字も聳ゆと当てたのを見慣れているから、そびやかす

の場合にも聳やかすと書くのは決して理由のない用法ではない。処で、先生の用例はどうかと云うと、一般に初期の作は振り仮名の附かぬ雑誌に書かれたから、読者の訓み違いを恐れて出来るだけ送り仮名を沢山に出されたのが多く、後期の作は皆新聞で発表されたから、ルビ付き活字の都合上なるだけ送り仮名を振り仮名へ繰り込んだものが多い。が、これは大体の傾向がそうなっているという迄で、先生自身は無方針の出鱈目である。余りそんな事には頓着していられたかつたと云つていい。前のそびやかすにしたら、てからが、一番意味のない聳かすが一番多く使われている。た、たよわすの如きは漂よわすと御叮嚀に語根のよまで出してあるものもある。尤もこれは先生ばかりが無責任と云う訳ではない、日本人の書く漢字交りの文章と来たら大抵いい加減なものである。例え、ばか、えり、みるの如き、顧みるとみを送って誰一人怪しむものもな

いが、あれは返り見るであつて、みは如何なる場合にも働かない語根だから、どうしても顧るといふように書くのが本当であろう。が、そう書けば却て世間から怪しまれる位間違ひの方が普及してゐる。処で、送り仮名はひとり動詞に於て問題になるばかりでない、形容詞でも、副詞でも、又それらの動詞や形容詞から導かれた名詞でも問題になる。少ないのなを出そうか出すまいか。めずらしいは珍らしいとすべきか、珍しいとしようか、それとも愛ずらしいとすべきであるか。これは形容詞の例である。いたずらには徒にと書くか、それとも徒らにと書くべきか。とこしなえには長えにか、長なえにか、それとも長しなえにであるか。これは副詞の例である。違い棚だの、乗り手だの、振り仮名だのというよな、動詞と名詞とから出来た複合名詞では、動詞の語尾のひやりは出したものであろうか、それとも出さないがよかろうか。世

間では出さないが普通らしいが、先生は多く出していられる。こうなるとまったくややこしい、手が付けられなくなる。が、全集のような纏まったものでは、何処かに統一を見出さないと気が済まない。

第二は漢字に於ける正字俗字の弁だが、これは余りやかましく云うと、私どものようなその方面に無学な者は閉口して投げ出す外ない。が、それは出来るだけ字典をたよりに正字を使うようにして行けば、校正の方針だけは立つというものである。ただ一つ困るのは先生自身が、あれだけ漢学の素養の深い人であつたにも拘らず、当字を平気で滅多矢鱈に使っていられることである。若しそれが単なる先生の間違いであるなら、いくら先生の間違いだつて校正者の権威として間違いを寛仮する訳には行かない。どしどし正しい文字に訂正して然るべきである。が、その中にはどう

も単なる間違いとは云えない、先生自身それと知りながら、わざとそんな当字を使われたらしく思われるのがある。わざとではなくとも、少くとも先生自身の文字に対する無頓着から来ているとしか思われれないのが随分ある。本来先生という人は、人も知る文章の調子に重きを置いた人で、眼で見えて書くよりは耳で聴いて文章を作った人である。従つてそういうったような無頓着さ加減はかなりあり得

べきことだと云わなければならぬ。こうなると、単なる当字も先生の作風の一端を示すものとして、是非とも保存しなければならぬことになる。では、保存するとして、何の程度まで保存したらいいか、こうなると又難かしくなる。先ず例を挙げた方が手ツ取り早い。例えば先生は凶事を兇事（『琴のそら音』）邸宅を庭宅（『猫』）趣向を手向（『倫敦消息』）呉紹の垢すりを語呂

の垢すり（『猫』）合巻の式を合衾の式（『猫』）なぞと書いて、平気で済ましている人だ。凶事を見事、合巻を合衾と書くなぞは余りひどい、第一体裁もよくないから、断然訂正することにする。趣向を手向、呉紹を語呂と書くなぞは全然先生の無頓着さ加減を表わしたものだ、それにしても他の意味に取られては困るから、これも訂正することにした。最後に邸宅の庭宅だが、これは無頓着から来たものであることは明白でもあるし、それに使い場所に依ってはその儘で意味も通ずるから保存することにするが、一歩の差は千里の差である。こうして一つ妥協すると、続々妥協を強要されるのが出て来る。例えば、先生は辛抱を辛防、人生観を人世観、鑑定を勘定、畢竟を必竟という風に書いていられるが、それぞれ意味も通ずるし、必竟の如きはそういうように書いた先例が古書にいくらかもある。勘定もありそうである。何しろあれだ

け漢学に達した人の書いたものだから、うっかり間違いだと思つて直したりすると、飛んだ失策をする。いつかも嶄新を斬新と書くのは見慣れないと思つて直したら、後で斬新の方が正しいと解つて、大いに狼狽えたことがある。こんな事を云うのは私の無学を表白するようなものだが、適例だから挙げて置く。その外先生はかんしやくを肝癩、疔癩、癩癩、りようけんを了簡、料簡、了見と三通りずつに書き、じようだんを常談、贅談、笑談。串戯と四通りにも書いていられる。いずれもその儘保存して差支えあるまい。殊にバケツを馬穴、インキを印氣と書くが如きは、元来洋語に漢字を当嵌めたのだから、どんな字を当てた処で構わない訳だ。それと同じように、じかに会つて話しするのじかにを自家に、ケチな奴を希知な奴、キタイな男を希代な男（以上三つとも『抗夫』）と書いたようなのは、俗語に漢字を当嵌めたもので、こん

な剽軽な字を当てたところに一種の面白味さえ出ている。切齒つまる（『抗夫』）の如きも、この当字が当っているかないかは別問題として、第一に見て面白い。で、こう漢字だけでも標準がまちまちではしようがない。何でもいいからその間に法則を求めて、先生の用字例というようものが定めて置きたくなるのは自然の数である。

第三の理由は、生粋の江戸っ子だけに、先生の作には随分江戸っ子の訛りスラングが出て来るが、この訛りを看過すると、全体の文章そのものがかなり間の抜けたものになり得る。先生も自身大分それを気に懸けていられたものらしい。江戸っ子は一体舌ツ足らずのものだが、中には野馬をのんま（『琴のそら音』）というように蹴ねるのや、いやにというところをやに威張ってやがるというように詰まるのも少くない。これは敢て先生一人という訳ではない、

江戸っ子一般の慣用法かも知れないが、私どもから見れば、先生特有の語法と云いたいような、先生の癖がある。例えば、私どもなら縦横十文字と云うところを、先生は必ず横縦十文字と云われる。経緯と書けば、普通ならたてよこと仮名を振るべきだが、先生は一人よこたてと振っていられる。私どもなら羽織袴と云うところを、先生は袴羽織と云われる。天然自然と云うところを、

自然天然じねんてんねんと云われる。尤も、これは先生ばかりでない、江戸っ子

は一般にそう云うものだという説もあるが、私の知っている限りに於ては矢張りそうは云わない。どうも先生一人の癖のように思われる。それから先生は或場合、惜しいと欲しいとを混同していられるようだ。『琴のそら音』の中に切支丹坂のことを、「日本一急な坂、命の欲しいものは用心ぢやく」とあるのは、どうしても命の惜しいものはの間違いとしなければならぬ。処が、偶

々それを注意する者があつても、強情な先生は頑として、自己の間違いを承認せられなかつたのである。その外先生はどうかした場合に否定と肯定とを取り違えられることさえある。

で、以上挙げて来たような理由から、私どもは会議の上仮りに『全集校正文法』なるものを拵えて、それに依つて『漱石全集』の校合に従事することにした。処が、文法そのものがもともと一時の間に合せて作ったものではあるし、それに校正をしている間には、後から後から新しい事実を発見して、標準もぐらつければ、私どもの意見も變つて行く。その結果、最初の期待に反して、極めて統一を欠いた、あの通りの全集を拵え上げたのは汗顔の至りである。

漱石の語学

夏目漱石先生が晩年独逸語を学んでいられた時、つくづく嘆息して、「僕の独逸語は丸でカンテンの中を泳ぐようなものだ」と云われた。いくら骨を折っても前へ出ないというシヤレである。独逸語がカンテンの中を泳ぐようなものなら、英語は水の中を抜手を切って泳ぐようなものか。先生の英語は達人の域に達していられたようだが、それでも陸上運動場を駈けるようなわけには行かなかったと思う。

漱石の墓その他

雑司ヶ谷の墓地へ行つて見ると、墓地の中央、杉と槻の林を背にして、表に故人の法名に並べて未亡人の赤い法名を彫りつけた巨大な石碑が立っている。これが文豪夏目漱石の墓だ。石は磨きのかかった常陸産の花崗石、石も丁度人力車か、さもなければ安楽椅子に法名が腰掛けている処を思わせるような、なかなかモダンなものだ。が、しかしたまたま雑司ヶ谷の墓地へ遣つて来て、故人の墓を弔った人が、これを見て、これが漱石先生の人格の一端でも、趣味の一片でも代表しているものだと思つたら、それは大きな間違いである。あれは勿論先生が亡くなってから遺族の手に成つたもので、もしいくらかでも趣味や精神を表わしているとすれば遺族の方々のそれであつて、先生の関知する所ではない。

そこから、一丁足らず離れた所に島村抱月氏の墓所がある。何でも自然石に人生と芸術に関する格言もしくは警句めいた、氏が生前の一句を彫りつけてあつたように記憶するが、あれも果して抱月氏の意志に適つたものかどうかは分らない。しかし漱石先生の場合はその

れ以上に先生とは関係のないものだとだけは云い得られるのである。

一体、先生は自分の墓をどう考えていられたらう。ある時、一本の枯木の下に小さな円い自然石（何も書かない）を据えたものを描いて、「わが墓」と題していられたのを見たことがある。又ある時、「おれの墓は広い野の末に土饅頭でも盛って、その上に円い石でも転がして置いてくれたらいいね」というような意味のことを云われたのを聞いたように覚えている。先生の自分の墓に

関する感慨は恐らくそれ位なものであろう。しかもそれは終に実行されなかつた。又実行されなくとも仕方のないことかも知れない。思うに、先生としては、そんな事どうでもよかつたのだ。

先生生前の感慨としては、よく平凡人の生活——つまり世間にも聞えなければ、騒がれもしない、自分は自分だけの事をして、他人の厄介にならず、黙々として生きて黙々として死んで行くといつたような、平凡人の生活を讚美していられた——さもさも羨ましそうに。これは既に世に立ってその名を謳われ、又それだけの業績も残した人の栄耀の餅の皮かも知れない。しかし、先生がその一面に於て、『門』の中の宗助のような生活に心からなる憧れを抱いていられたことは疑いもない事実である。私も——と云つて、勿論先生のような名前は持つていないが——それでもなお齢五十を越ゆるに及んで、しみじみ先生の氣持が分るような氣がし

て来た。金さえ不自由しなかつたら、そしてつづまやかな、事足るだけの生活を営むことが出来たら、名前を売ることなど毫も必要としない、同時に省て恥ずる所のない、隠れた平凡人の生活ほど羨ましいものはない。

先生は「有名になる」とか、「名を後代に残す」とかいうことが大嫌いであつた。そして、私どもに向つて、よく「豆腐屋の主人にも、酒屋の親爺にも、機会さえ与えられたら、大政治家にでも大文豪にでもなり得る資格を持つて生れたものが幾人もあろう」と云い云いされた。一つは私どもが早く「有名」になろうと思つて焦躁つているのを抑えるためでもあつたらう。私は反問した、「それじゃ先生の建前からすれば、豆腐屋に生れたら、豆腐屋としてその分を尽して、大過なく一生を終るのが人間の理想だということになりますね?」「そうだ」と、先生は大きく點頭いて、

「豆腐屋は豆腐屋、米屋の主人は米屋の主人として、他を犯さず、他からも犯されず、正直に一生を過ごした上、名もない一個の市民として土の下へ入った方が、大臣や大将になるよりも、人間としてどの位高尚な尊ぶべき生涯だか分らない」と云われた。私は惘然として聴いていた。そして、今でも時々その言葉を想い出すのである。

近頃唯物的弁証法なるものが流行つて来た。それに伴れて、夏目漱石を今日に生かして置いたらというようなことを興味を持って訊く人がある。先生は徹底した唯物論者ではあつた。併しながら私どもの聞いた範囲では、「金は過去の労力の象徴である。敢て卑しむべきでない」とか、「株で儲けたような浮いた金と、吾々の汗と労力とで得た金とは紙幣の色でも違えて置いて貰いたいものだね」といったような、極めてナイーフな二三の見解を口に

されたに留まる。『心』の巻末でも自白していただける通り、晩年の先生は過去の明治時代の作家を以て任じていられた。恐らくは先生の蝕まれた健康がそうさせたのでもあろう。

鈴木三重吉君は何処やらで、「先生位一生の輪廓をはつきりと生きた人はない」というような意味のことを云っていた。これも先生に接触した程のものなら、誰しも感ぜずにはいられない先生の特徴であつたろう。私は鈴木君の意味を正解しているかどうか知らないが、先生に接すると、この隠やかな落ち着いた応対の中に、何よりも先ず正しい人という感銘を強く与えられる。先生は決してその生活に曖昧ということを許されなかつた。正邪の観念がはつきりしている。尤も、それを他人に強いられるのではない、ただそれによって自己を律していられるに止まつた。しかも、先生に対する者がその反映を受けるのは已むを得ない。心に疾しい

ことのある時、先生の前へ出ては、私なども実際忸怩たらざるを得なかつた。世に変人を以て先生を遇する者があるのは、先生のこの徹底した正しさが、無意識の妥協とごまかしとに充ちた世間に奇異の感を与えたからによることは云う迄もない。しかもこれ程迄に正しく生きようとしていられた先生も、朝日新聞社に対しては、自己の人格にまで喰い込まれない範囲に於て、可なりな程度まで妥協をしていられた。例えば―と云つて、あまり適切な例ではないが―毎日の新聞に連載された小説に就いても、その日その日に読み捨てられる新聞の載せ物であることを意識して、常にそれに順応するようになつていられた。正宗白鳥氏が『道草』の感想を述べられた際であつたと思うが、新聞の続きものであるという芸術上の拘束に言及していられたのは、やはりその道の苦勞人でなければ云われない眼の着け所だと思つた。こうして新聞

社に対しては、或程度までの妥協に甘んじていられた先生が、あ
あして大学に対してのみ終生不快の念を抱いていられたのは、私
どもの一寸不可解に思う所である。か、先生といえども人間であ
る。その間に虫の好くと好かないのとの別はあるう。それに、最
初から先生の価値を理解してかかったのと、初手からそれに無頓
着であつたのでは、先生のそれに対する態度に寛容と不寛容と
の別を生じたのも、固よりその所であつたかも知れない。

最後に、最近に頭を擡げた思想——即ち人間の平等と機会の均
等を主張する思想に対する先生の考えはどうであつたか。これは
先生を知ろうとする人々に対して興味ある問題には相違ないが、
ただ私どもとの座談の折々に、「まあ仮に彼等の言い分を通して
財産を平分して見るがいい、人間の本性の変化しない限り、期年
ならずして再び不平等な世の中が現出するよ」と云つていられた。

「道徳は天から与えられたものでも、神が造つてくれたものでもない、人間が生活する上の必要から拵えた相互の約束である」というように考えていられた先生の倫理観、人間観から推せば、こういう言葉の出るのは或いは当然の帰結かも知れない。そして、その言葉が露西亞の現状を見てもその儘実証せられているという外に、先生のこの問題に対する意見としては、何等文書の徴すべきものがないのを遺憾とする外ない。想うに、先生は「われはこの世に平和を齎すために来たのではない、乱を齎すために来たのである」と宣言した基督のような人ではなかつた。先生自身も云つていられるように、決して宗教家でも革命家でもなかつた。一代の師表とするに足る人物だなぞと云つただけでも、立ち所に先生から怒られてしまうだろう。が、少くとも、私どもに取つては又と得難い師であつた。私どもの窺き視ゆすることを許さない天分を

以て生れて来ながら、しかも本当に懐しみのある師であつた。私は先生を失つてから、つくづく自分自身では師となれない、しかも師がなければ一日も生きて行かれない、永遠の弟子であるような気がしている。

師弟の情誼

旧臘九日の夜、故先生の法会が済んだ後、私は鈴木三重吉君に導かれて小宮豊隆君と共に或家に集まった。

私は双鬢既に白く、小宮は半白、三重吉は白くはならない代りに大分天上が薄くなっていた。三人共に顔を見合せて、悵然たるものがあつた。しばらくして「とにかく、われわれは夏目漱石と同時代に生れ合せて、或期間直接先生を知り、先生と膝を交えて語ることが出来た。それだけは幸福であつたね」と、私は云い出して見た。二人とも言葉なくして點頭いた。

「今になつて思うと、僕は先生の生前」と、私は函に乗つて語りつづけた、「何を書くにも今度は一つ先生を感服させてやり

たいというような気が付き纏った——」

「そりや君はそうじゃった」と、三重吉はすぐに口を挟んだ、
「何ぞと云うと、ドストエーフスキなぞ振り廻しやがって……だが、おれ達にはそんな気はなかった。おれ達はもつと純な気持で

——」
「まあ待ってくれ」と、私も相手を留めた、「僕は今懺悔をしてるんだ。で、僕にはそういったような、いわばお、お、おけなき気持がなかったとは云われない。しかしこの頃はそうじゃない。今にして先生在さば、僕はただ先生に卑しまれたくない。この頃はただそう思つて書くようにしている。」

先生に感服させてやりたい！ 私としては、これはやや露悪主義の言葉である。弟子として、ただ先生に認めて貰いたかったのだ。私はただ認めて貰いたさに先生に接近した。これも不純と云

えば確に不純な感情である。が、私はもともと一本立ちの出来な
い「永遠の弟子」であつた。先生が亡くなられた時、私が一ばん
まごついたのは「今より後おれは一体誰を宛てに、誰に認めて貰
おうと思つて書くのだ？」ということであつた。当時私は既に三
十六歳であつたのである。現今の文壇の士なぞと比べたら、全く
幼稚なものだと云わなければならぬ。が、齡知命を越ゆるに及
んで、初めて「先生に卑しまれたくない」という気持だけになつ
た。私としては一つの進歩である。

長谷川如是閑氏は新聞記者として先生の同僚の一人であるほか
りでなく、又先生の知己の一人でもあつた。日頃氏と同席した時、
私は氏に向つて、

「あなたの許へは若い人達が集つて来るでしょうが、漱石先生
の許へ集つた連中の持つていたような気持が、今の若い連中に多

少しでも残っているでしょうかね」と訊いて見た。氏はからからと笑って、

「そりや君、あの時分だつてあれは特別だよ。あんな師弟の関係は昔だつてありやしない」と再びからからと笑いつづけられた。

あの時分だつてない！何でもないことながら、私は一寸面喰つた。あんな師弟の情誼は昔だつてありやしない！ 実際その通りかも知れない。私どもはただ自分達の顔を知らずにいたばかりである。如是閑氏の云われるように、それが時代錯誤の現象であつたにせよ、又は旧時代の名残りであつたにせよ、とにかくそういう師弟の関係があつたとして、一体そういう師弟の情誼は何処から生れたのか。勿論、故先生の人格の然らしむる所であつたのは云う迄もない。が、先生一人では師弟の関係は生じない。そこには又そういう弟子があつたのである。

その点から見て、何時か吉村冬彦氏が何かに書いていられた話を面白いと思う。それによると、先生が洋行から帰って来られた時、吉村さんは先生を停車場に迎えてから、早速又先生の奥さんの実家に、先生を訪ねて行かれた。時分時になってお寿司が出たが、しばらくそれを突っついていっているうちに、先生は思わず笑い出された。いわく、「先刻から見ていると、君は寿司を喰うにも僕の真似ばかりしているじゃないか。僕が海苔巻を取ると、君も海苔巻を取る、僕が卵焼きを喰うと、君も卵焼きを喰う」云々。どうも自分ではそんな気もなかったが、不知不識のうちに、矢っ張り先生の真似をしていたものと見えると、吉村氏自身述懐してられる。氏はその当時熊本の高等学校から上って来たばかりの田舎者であった。弟子の真似に気の附いた先生は勿論江戸っ子である。だから、江戸っ子が田舎者の欠点あをら目附けた滑稽な話として

しまえば、それ迄だが、その裏に何と言葉には云い表わせない師弟の情誼が溢れていることよ。師は、普通なら弟子の極りの悪がるようなことを平気で云つてのけている。が、その実師はそんな事まで自分の真似をされたことが嬉しいのである。有難いのである。自分の嬉しく感じたこと、有難く感じたことを発表するのに、却て相手が極りを悪がるようなことを以てするのは、江戸っ子の悪い癖だと云えば云うようなものの、何だかそこに情人同志の痴話（私の誇張を許せ、誇張なしには何一つ云うことの出来ない私だから、）とでも云いたいものがあるような気がして、私どもは健羨の情に堪えない。

要するに先生は寂しかったのだ。洋行から帰って、久し振りに妻子の顔を見て、尚且こうして他人に求めないではいられない程先生は寂しかったのだ。もし故先生とその弟子との間に他に見ら

れないような、特別の情誼があつたとすれば、その俑を作つたものは吉村さんである。他は小宮、鈴木、野上、それから私にしても、皆それに倣つたものに外ならないと、ただこれだけの事が云いたかつたのだ。

『猫』の中にあられるのは、弟子としても寒月先生以前の人達で、寧ろ苦沙弥先生のお友達だと云つた方がいい。もし先生の作品中に、先生の弟子に対する気持の窺われるものはと訊かれたら、やはり『三四郎』だと答える外あるまい。三四郎の故郷福岡県京都郡犀川村は小宮の故郷をそのまま取つたものである。しかし熊本の五高を出てぼつと出の田舎者として上京するあたりは、寧ろ吉村さんである。三重吉はあの中の与次郎に擬せられることを大層いやがるが、さりとして与次郎をすっかり三重吉から取り上げて、あれは死んだ高須賀淳平だと云つてしまつたら、三重吉は

寂しかる。

広田先生の引越しを手伝って、猫を籠へ入れて待つて行く途中小便をかけられるなど、三重吉として逃れられない証拠もある。私自身も引越しの前に家探しのお供をして、石の門のある家を推薦して先生から叱られた。「新しい男爵のようではないですか」は、その当時日清戦争後で、旅団長が皆新しい男爵になったからである。この点だけでは、私も三四郎と与次郎の中へ喰い入っていると云つていい。

が、私が本当に先生に描かれたような気のするのは、寧ろ『野分』の中の高柳である。先生と私との関係は広田先生と三四郎や与次郎というよりも、寧ろ道也先生と高柳君とに近かった。それだけ暗いものがあつた。何日であつたか、先生は夕方晩く丸山福山町の私の下宿している家の玄関に立たれた。そして、「これか

ら飯を喰いに行くが、君も一緒に行かんか」と誘われた。私は二言と云わず応諾した。先生はその頃本郷にたった一軒あった洋食屋の真砂亭に私を連れて行かれた。そこで御馳走になって、それから切通しの坂を降りて、池の端を一周りして、弥生町から大学と一高との間へ出て来るまでの間に、私は妙に感傷的になって、自分の一身上の事情を逐一先生に打明けた。私は今それを思い出しても顔が赭らむような気がする。恩に狎れる——先生の方ではそんな打明け話までされようとは期待していられなかつたに違いない。そう思うと、実際今でも口を抿じ千断りたいような気がして、たまらない。が、先生は始終無言のまま黙って聞いていくられた。私は西片町のS字坂の上までお供をして、そこで先生と別れた。私はその時初めて無言の有難いことをしみじみ体験した。

千駄木から西片町、間もなく早稲田へと、先生はだんだん居を移された。それと共に、先生は東京朝日新聞社に入つて、純然たる作家として立たれるようになった。私どもは木曜日の夕方になると、極つて先生の書齋に参集した。定連の外に、珍らしい客の一人二人あることもあれば、ないこともある。話題は——どうもその時分弟子連があまり書かなくて、先生一人脂が乗つて、『虞美人草』『抗夫』『夢十夜』『三四郎』と次ぎ次ぎに書いて行かれたのは汗顔の到りだ——で、話題はおのずと先生の作品に対する弟子どもの無遠慮な批評が多きを占めるようになった。先生もなかなかそれに屈しないで、若い者と一緒になつて渡り合われたが、たまには屑く胃を脱がれることもあつた。その蟠むだかまりのない対話が私どもには何とも云われない程嬉しかった。三重吉が龍に入れた文鳥を持って来て、強いて先生に飼わせるようにしたのも、

その頃のことであつた。で、そんな他愛もない雑談に夜を更かして、いざと一同が立ち上る時は、夜も十二時過ぎ、大抵は一時を打ってからであつた。未だ市電が今のよう^にに普及しない時分のこととて、それから四人連れで本郷まで歩いて帰る。伝通院前を脱けて、小石川初音町の溝（おい）のそばまで来ると、橋の袂（かた）に毎晩一軒のおでん屋が出ていた。寒いからそこへ寄つて、又一しきり先生の噂や馬鹿げた話しに市が栄える。野上君などは、染井の墓地の近くの植木屋に住んでいたから、自宅へ着くと大抵鶏が鳴いて夜が明けたそう^な。

私は前に先生と自由に話しをされる吉村さんを羨ましいと思つたように書いたが、もうこの時分にはそんな気はお互に微塵もなかつた。そして、めいめい先生は自分のものだと思つていた。少くとも、自分達共同のものだと思つていた。家族の方々の先生で

はなくして、弟子どもの先生——これは実にいわれの無い話である。が、そういう気持が弟子どもの間にあったことだけは事実だ。私どもは決して先生の家族を無視したわけではない。それ処か、人によって程度の差こそあれ、家族の方々に対してはそれぞれ親愛の情を抱いていた。それにも拘らず、先生はやっぱり自分達のものだという気がしていた。そして、こんな気持は一方だけで抱けるものでない。先生にも責任がある——とは云わないにしても、先生の方にもそれを許して置かれたような形跡がありはせぬか。

その当時私どもにはよく分らなかつたけれども、とにかく先生は家庭的に寂しい人であつた——だから弟子どもがそんな気持を抱くことも黙って許して置かれた。そして、それなればこそ、長谷川如是閑氏から「昔だつてありやしないよ」と云われるような、師弟の情誼が生じたのではあるまいか。

私どもの仲間にH君という宗教科出の男があつた。独逸語がよく出来たが、よく出来る以上に自信の方が強かつた。馬面で反歯で、色が真黒で、眼がぎよろりとして、男振りには何一つ取柄がなかつたが、それでいて自分では菅原道真の子孫だと称していた。そして着ていた黒木綿の羽織の定紋を見せた。見せられた者は大概その梅鉢の紋所とH君の顔とをそつと見比べるのを常とした。H君は又相手が黙っているのを見ると、自分の言葉を疑われたように侮蔑を感じて、滔々とその由緒正しい系図を述べ立てるのを常とした。なに、こちらはH君の系図を疑つたわけではない、ただ道真公からH君に到る数十代の間に起つた顔面の変化に、こうもなるものかとただ惘れて見ているだけである。

たしか先生が胃腸病院か、或いは大阪の湯河病院かに入院中であつたと思う。家族の方々がどこかへ避寒に行かれた留守中、H

君は独身者のこととて先生の家の留守番に頼まれて行ったことがあった。書棚の本は何を引出して読んでもいいという特権を与えられていたので、H君は大喜びで先生の書齋に陣取った。そして、その時分のことだから瓦斯暖炉ガラストープの珍らしさに、汗をだくだく流しながら朝から晩まで、起きるから寝るまで焚きつづけた。その結果、暖炉一つだけで瓦斯代一ヶ月二十八円を払わせて、大いに奥さんを面喰わせたという珍談がある。この珍談はH君の性格を紹介するために一寸述べたまでで、いわば序曲プロローグのようなものだ。私か聞いて貰いたいと思つた話の本筋はこれからである。

或る日——たしか先生が退院されて、自宅で静養中、私どもが木曜日でも遠慮して出掛けなかつた時分のことだと思ふ——このH君が朝っぱらから先生をその書齋に訪ねて行った。数回留守番をさせたことではあり、先生も快く面会されたが、H君の方でも

気兼ねはしなかった。が、H君という人は話の面白い方ではない。それに先生も胃が悪いから強いて話しをするのが大儀でもあったらしい。二人は顔を見合せたままむずむずとしている間に、午飯の時刻になった。H君は先生と膳を並べて午飯の御馳走になった。午後になつても、H君は何を云い出すでもなければ、又何を頼みに来たというわけでもない。ただむずらむずらとしている。先生も亦客を放つて置いて、自分は自分で勝手に本を読むというような、無遠慮なことをする人ではなかった。そのうちにやつと夕飯の時刻になった。H君は又先生と膳を並べて夕飯の御馳走になった。

それが済んでから先生は、例によつて、医師の処方によるいろいろの薬を服まれた。薬を服んでしまうと、不凶想い出したように、「H君、僕はこれから一寸散歩して来るよ」と云い出された。

先生はその時分、これも医師のすすめに従つて、一日に一度は屹度時間を定めて散歩をするようにしていられたのである。「で、君はもつと遊んで行くなら行きたまえ。」こう云い云い先生は立ち上られた。

「先生、散歩ですか」と、H君は吃驚したように先生の顔を見上げた。「先生が散歩されるんなら、私も一緒に出ましよう。」そう云いながら、H君はあわてて先生の後から随いて出た。先生も別段随いて来るなどは云われなかつた。こうして二人は一緒に早稲田の門を出た。

二人は榎町の通りを真直に矢来の交番下まで来た。ここを左へ曲つて江戸川縁へ出るのが、H君の下宿している本郷へ帰る順路である。が、H君は別段そうする様子も見えない。先生が桜の洋杖を突いて、こつこつ坂を上り始めると、H君もその後から黙つ

て随いて行く。二人は寺町の郵便局の前を通つて、日のあるうちに神楽坂へ出た。神楽坂を降りて、濠端の通りへ出た。ここからも本郷へは帰られる。が、H君はやっぱり先生から離れようとしてない。先生は又牛込見附を這入つて、富士見小学校の前のだらだら坂を上つて行かれた。H君は影の形に添うが如くに随いて来る。それから二人は偕行社の角にある石の燈籠の下まで来た。ここからはぼつぽつ灯のとぼり始めた東京の下町が一目に瞰下されるのである。

その角まで来て、先生が一寸足を留められると、H君は何気なくその儘五六歩九段の坂を降り始めた。先生はそれを見て、

「おお、君はそちらへ行くのか、僕はあちらを廻つて帰るよ」と云いながら、内濠に添うて英国大使館の方へまわる寂しい道を杖で指された。

「え、あちらへお廻りになるんですか。じゃ、私もお供しましょう」と、H君は又もやすぐに踵かかとを返そうとした。

こうなつては、さすがの先生ももう敵わぬと思われたのである。観念して、

「H君、実は僕は一人でもう少し散歩したいんだよ」と、初めて明白に切り出された。

で、やっとH君も合点が行つたと見えて、すごすごと一人で坂を降りて行つた、ということである。

この話は私が故先生の口から直接聞いた話だから、私の覚え違いでない限りは間違いはないものと思つて頂いて宜しい。実際、H君もそこ迄先生に云わせるのはひどい。私も随分通じない方が、H君と来たら又輪をかけて通じない男だから、この位の事は本当にあつたらうと思つと、当人を知っているだけに一層可笑し

くなる。が、H君も単に通じないばかりでなく、先生となら本当に奈落の底までも一緒に散歩する気でいたろうということを察してやらなければならぬ。そして又先生はこうした通じない男が別段嫌いではなかった。笑って話されたが、その時は迷惑でも、後では愉快的な追想であつたに違いない。この一笑話がちつとでも先生とその弟子との関係を説明する役に立てば私の幸福である。

漱石と寺田博士

一

私が寺田さんに初めて会ったのは——とも云われない、その以前にやはり漱石先生のお宅で、多人数会合の席上で二三回は会ってるだろうと思うが、はっきりした印象が残っていない。はっきりした印象の残っているのは、明治三十九年八月二日である。これは漱石先生から翌日頂いた返事——私のその晩出した手紙の返事——によって明白である。

私はその年の七月大学を出たばかりのほやほやの文学士である。勿論就職もしていないし、又そんな望みも薄かった。しかし漱石先生の宅を訪問したのは就職の依頼ではない、ただ無駄話に出掛

けたのである。その時先着の客に寺田さんがあつた。私は先生と寺田さんの話しを傍聴しながら、ただまじまじと二人の容子を眺めていたらしい。その時どんな話が出たかは一つも覚えていないから、先ず聴いていたよりは、見ていた方が主であつたと思われ。これは先輩、長者の席に後輩もしくは田舎漢が列なつた場合にあり勝ちのことだから、なにも私一人に限つたことではない。

何でも寺田さんはその時例によつて白のリンネルの、それも幾度か水をくぐつたらしい皺苦茶の洋服を着ていられたように思うが、その後も始終そういう服を着ていられたから、これは後からくつつけた連想かも知れない。ただ確実なことは黒の蝶結びのネキタイをしていられたことだ。そのネキタイは、今は多分そんなのはあるまいが、初めからちゃんと結んであつて、背後でゴムのバンドで留めるような仕掛けになつたものである。その蝶結びのネキ

タイがカラーのボタンを外れて、だんだん上へ上がって行く。そして、寺田さんの長い頸くびの咽喉のどぼとけ仏の所へ行つて留まる。寺田さんは頻りに先生と話しをしながら、気にしてはそのネキタイを下げられるが、それが又すぐに外れて上へ上がって行く。

『吾輩は猫である』の第一冊が出た頃で、玉擦りの寒月は寺田さんだという評判が立っていた。見ると、寺田さんの前歯は『猫』の中に書いてあるように一枚欠けてある。こんな証拠があつては、いくら自分のことでないと抗議をしても仕方があるまい。私はそれを気の毒と思うよりは寧ろ羨ましいような気がした。が、蝶結びのネキタイが外れるのばかりは何だか気の毒なような気がして、どうかならぬものかなと気を揉みながら、私はその欠けた門歯と蝶結びのネキタイを等分に見較べていた。すると、その間に若い婦人が主客の前に茶菓を運んで来られた。私は一年足らずも先生

の門に出入していたけれど、奥さんの見参に入ったのはこの時が初めてである。だから、これが先生の奥さんだとは知らない。御承知の通り、先生は年よりも老けて見える人である。そこへ奥さんが又年よりも若く見えたものだから、どうもこれは先生の奥さんじゃないような気がした。それに先生の奥さんともあろうものが、自分でお茶を汲んで下さることはあるまいというような、田舎漢らしい遠慮も手伝った。しかし、万一奥さんであれば、又そのように丁寧に挨拶しなければ済まない。いずれにしても、寺田さんの挨拶の仕振りを見ていようと決心した。処が、寺田さんは自分の前へ茶碗を出されても、「ふむ」と云ったように、首を一つ背後へ反らしたばかりだ。仕方がないから、私の番になっても、やはりその通りに首を二つ背後へ反らして置いた。もしこの寺田さんが茶碗を引っくり返したら、私も一緒になつて茶碗を引つく

り返したかも知れない。その位私はずぶの百姓であつたのである。が、下宿へ戻つてからも、どうもその事が氣になるので、その晩早速先生に手紙を書いて、一体今日出ていらしたのは先生の奥さんですか、先生の奥さんにしてはどうも若過ぎる、しかし果して先生の奥さんであつたとすれば、誠に失礼したと、お詫びがてら、今思えば随分遠慮のない質問をしたものだ。それに対して、先生から、『書簡集』の中にもあるように、「君にお辞儀をしたものは正に僕の妻にして年齢は当年三十。二十五六に見えた申し聞かしても喜びそうもないから話さずに置く。僕の妻にしては若過ぎるとは大に此方を老人視したものだ」という返事を頂いたのである。

昨年の夏漱石先生の二十回忌記念として、新に全集を発刊する相談会が星ヶ岡茶寮で催された時、私は久し振りに寺田さんに会った。寺田さんの奥さんとそのお妹さんには時折お目に懸る機会があつたが、寺田さんに会つたのは実際久し振りであつた。そして、妙に寺田さんが年を取られたような気がした。そう思つたのは私一人でないと見え、鈴木三重吉君の如きは、「寺田さん、あんた未だそんなに年取つて見える年齢じゃないだろう。それは入歯が悪いんだよ。いいから入歯を代えて、一つ若返りなさい」と、面と向つてずけずけ云つていた。寺田さんはにやにや笑いながら聞いていられた。

その席上、私に漱石先生の「言行録」を集めろというような提議が一同からあつた。私は他に遣りかけた仕事もあつて、あまり

気が進まなかつたので生返辞をして置いた。処が、その後どうしても遣つてくれというような話が持ち上つて、私は九月になつてから一度寺田さんのお宅へ相談に行つた。で、もし寺田さんが一語でも「それに及ぶまい」と云われたら、断じて遣らぬ腹であつた。然るに寺田さんは、それ処か「是非遣つて貰いたい」というので、九月の初旬第三高等学校の校長であつた溝淵進馬さんの亡くなつた例を挙げて、

「夏目先生の大学寄宿舎時代には、隣室に浜口雄幸だの、大原定馬だの、溝淵進馬だのという人々がいられたそうだが、どうも土佐ツぽうというものは議論好きで、朝から晩まで議論ばかりしていて、八釜しくつて困つたと、僕に向つて云われたことがある。

（これは寺田さんが同じく土佐人である処から、先生はわざと当てつけてそう云われたものらしい。）処が、その浜口さんも大原

さんも疾うに亡くなって、溝淵さん一人残っていたのが、これでも二三日前に亡くなった。こうして先生を知っている人は続々死んで行く。僕だって十年経てばもういやしない。その意味に於て、『言行録』の仕事は本当に一日を緩^{ゆる}うすべからざる仕事だよ」と云われた。私はその熱心さに絆^{ほだ}されて、「では遣ります」と即座に請合ってしまった。来た時とは丸で反対の決心をしたのである。

その後同じ仕事について相談するため、私は二三度引続いて寺田さんを訪問した。その都度寺田さんは家の中ながら杖を突いて応接間へ出て来られた。そして「どうも腰が痛んで困る。神経痛らしいが、未だ医者にはかからない。僕の病気はそこらの医者には分らないし、分るような医者は威張っているから厭だ」と、まるだ宛然駄々ツ児のようなことを云っていられた。「分るような医者」

というのは、大学のお医者さん連のことらしい。で、その後から「君、いつか真鍋君のことを書いたね、あれは実に痛快だったよ」と、例によって顔中皺だらけにして笑っていられた。実際私は五六年前朝日の学芸欄に真鍋国手に「大人の百日咳」を診察して貰った話を書いたことがある。しかし私はただ国手が診断についていかに敏感であるかを叙述したままで、決して国手を遣っ附けた覚えはない。が、寺田さんのようなデリケートな性質の人から見れば、あれでも遣っ附けたことになるんだろうと思ったら、内心少々可笑しくなった。同時に寺田さんと私とでは、この位対人関係の認識が違うのかと思うと、何だか自分が下品なような気がして、反省もされた。

十月二十四日の午後、私は寺田さんがいよいよ病床に就かれたと聞いて、田原屋のメロンを提げて見舞いに行った。病床に就か

れたといつても、私は早く医者にかかつて、本格的に養生されたらよかろうと願っていたから、いよいよその気になられたんだなと思っただけで、これが死病になろうなどは夢にも思っていないかった。で、病床に通ると寺田さんは、「いよいよ降参して医者にかかったよ」と笑っていられた。「医者にもよく分らぬらしいが、何でも腰のあたりの背中の方に腫物が出来たというような説もある。いずれ永くはかかるらしいが、生命には別条ないようだ」という返事、私も勿論その積りである。で、その月は丁度『漱石全集』の第一回が配本になった折とて、月報の中の『言行録』に載った前田つな子刀自の若い頃の写真の話が出て、「あれはインテレクチュアルな好い顔で、とれなら先生も気に入ったろう。僕もこの顔は好きだ。あの話の中に、山川さんはよく話しをなさるが、先生は滅多に口を利かれなかったとあるね。あれは先生、自

分が気に入っていたものだから、色気があるので口が利けなかつたんだね」と、寺田さんは又顔中皺苦茶にして笑われた。

寺田さんは、前に見た時より多少面糞おもやつれはしていられたが、元気はなかなかある。そして、仰向けに寝たまま、すばすばと頻りに巻烟草をふかしては、苦しそうに咳き込まれる。その息の下から、

「どうも咳をすると、腹の筋が緊張して、脊骨が痛む」と云われるから、「そりゃ烟草は好くないでしょう、少しお止めになつては」と云うと、「こう寝てばかりいては、烟草でも喫のまなくちや遣り切れない」と、又しても駄々ツ児のような返辞である。が、その駄々ツ児のような返辞の中に、私は或種の親しみと懐しきを感じて嬉しかった。

で、家人の注意もあつたりするから、間もなく辞して帰ろうと

すると、当の寺田さんは「もう帰るのか！」と吃驚びっくりしたように私の顔を見ていられた。「ええ、今日は帰ります。まあ泰然としてゆつくり寝ていらっしやい」と挨拶したら、「痛くさえなけりや、いくらでも泰然として寝ているが、時々発作的に痛み出すからあまり泰然ともしてられない」という返辞であった。私はその返辞を聞き流すようにして病室を出た。

これが私の生きている寺田さんを見た最後である。十一月一杯は、私は長男が結婚したために、何や彼や取紛れて寺田さんを見舞う暇がなかった。尤も、十一月二十二日、わざわざ仙台から出て来て、その披露宴に列席してくれた小宮豊隆君は、その席へ来る前に寺田さんに会って来たそうだ。そして、後で聞けば、その時既に夏目先生の臨終の前に見たような死相があらわれているのを感じたということである。が、そんな事は聞かせてくれぬから、

私は固より知ろう筈がない。それから二三日後、故篠本二郎氏の原稿に関して、寺田さんから奥さん代筆の書面を貰った。何でもその書面によると、寺田さんはあの原稿について伝言を小宮君に託されたか、或いは託さなくとも当然小宮君から伝わっているものと考えていられたらしい。が、小宮君も取紛れてか、その席上では一語も寺田さんのことに言い及ばさなかつた。で、私は代筆の書面を見ても、自分などは寝ていなくとも時たま代筆をさせ兼ねない、寺田さんは仰向けに寝ていられるのだから代筆位は当り前だ位に考えて、重態なぞとは夢にも考え及ばなかつた。今にして思えば、これが寺田さんの病床にありながら、私の『言行録』の仕事の念頭に置いて下すつた最後であつた、少くとも最後になつてしまつたのである。

十二月六日の夜、私は『言行録』の談話を聞くために、かねが

ね寺田さんから一度訪問するよう云われていた木部守一氏を田園調布のお宅に訪問した。木部さんは寺田さんの五高時代の同窓で、その後理科から法科に転じて、外交官から更に実業界に入られた人である。寺田さんは木部さんの頭脳については常に敬意を以て語られ、何事にも独自の意見を有する人だからというので、夏目先生の『言行録』にも、先ずこの人の話を聞くようにすすめられた。私は十月中から木部氏に会見を申込んだが、いろいろな都合で遷延して、この日初めてその目的を果した。で、早速その結果を寺田さんに報告したいと思つたが、とにかく寺田さんの報告の一つを果したということに安心して、その報告はまあ後でもよかろうというような気持もあつた上に、十一月中のどさくさから自分自身の仕事も支^{つか}えていたので、とうとう師走中は横着を極めて、その報告も、寺田さんの病床を見舞うことも懈^{おぼた}つてしまつ

た。今から思えば実に残念でたまらないが、どうにも仕方がない。が、いよいよ暮れに押し詰って、東朝の学芸欄のために、初春の読み物として、『人を褒める』の無文を草した時、どういふものか真先に寺田さんのが書きたいような気持になった。私から云えば「虫が知らせ」たのである。が、その時は、そんな事とは知らないから、寺田さんがこれを読んだらどんな顔をされるだろう？ 苦い顔はしてもまさか腹を立たれるようなことはあるまい。とにかく春になったら様子を見に行こうと思っている間に、二十九日危篤の新聞が出てしまった。私はその時風邪発熱で病臥中であつたが、新聞を読んでも未だ嘘のような気がしていた。すると、三十一日の午後二時岩波から寺田さんの臨終を知らせてくれた。私は病床から起き上って急いで行って見たが、どうしても寺田さんの死顔を見る気にはなれなかつた。私としては、最後に会つた時

のあの笑い顔を何時までも記憶に留めて置きたかったのだ。で、臨終の寢室の枕辺に立っても、わざと顔の被いを取らずに置いて貰った。

私は正月元旦から出た『人を褒める』の最後へ持って行って、「寺田さんの死は惜しいと云うよりも、私には何だか腹が立つ位である」と書き添えた。誰かから不当な損害でも与えられたような気がして、腹が立つのである。誰が怪しからんか分らないが、とにかく怪しからんような気がして、腹が立つ。これが私の実感であった。（「損害」といえば、私自身の損害も無意識に加わっているかも知れないが、そんな不純なつもりはない。もつと大きな損害である、国家人類のための損害である。）

私の勝手を云えば、漱石先生の『言行録』の半分は寺田さんに背負って貰う位の了簡でいた。しかも「十年経てば、もう僕もい

ないよ」と云つ。たその人は十年どころか、百日も経たないうちに逝ってしまった。実際、「虫が知らせる」ということはあり得る。寺田さんがあんなに『言行録』のために気を揉まれたのは、一つは寺田さん自身自覚せずして、この「虫が知らせた」のかも知れない。寺田さん自身の話を聞かないで済んだのは、いかにも残念だけれど、七、八年前に寺田さんの書かれた『漱石先生言行録』の原稿は未だ残っている。私はそれをせめてもと思っている。

漱石と生田長江

一

生田君の若い頃の思い出を語れば、殆ど尽きる所を知らない位多くあるが、その一つを話せば、或時二人で話している間に夏目先生の噂が出た。その時僕はこんな事を云った。

「どうも夏目先生という人は、僕が何事かを云い出すと、必ずその反対説を唱えられる。それが咄嗟とつなに出て来るんだね。だから、僕が先生は旋毛つむじま曲りだと言ったら、いや、僕は断じて旋毛曲りではない、僕の旋毛は直きこと塗の如しだ。ただ僕は君等の説があまりに一方に偏しているから、その反対アンチセンス当を立ててお目に懸け

るばかりだと云っていられた。つまり先生という人は、正、反、合と行かなければ気の済まない、一種のヘーゲリヤンだよ」と。

それを聞いて、生田君は又こんな事を云った。いわく、「それやヘーゲリヤンでもあるうが、どうも僕には、先生という人は弟子の欠点を見て、それを匡正きやうせいしてやろうという方面に、主として頭腦の働く人のように思われるね。が、僕の考えでは、若い者というものはその欠点を是正しようとかかかって、決して是正されるものでない。それよりも煽おだてるに限る。煽ると云うと語弊があるが、どんな人間にもどこか長所はあるから、その長所を見てそれを奨励してやるんだね。誰だつて褒められれば嬉しいから、いよいよその長所を發揮するようになる。こうして長所が助長されて行けば、短所は自然とその蔭に隠れて、しまいには消滅するものだよ」と。

私に云わせれば、夏目先生と雖も、必ずしも他人の短所ばかり見て長所を認めない人ではなかつた。寧ろ大いに他人の長所を認めた人である。現に私の友人の鈴木三重吉君の如きは、ホトトギス派の写生文から入つたために、最初からその長所を先生に認識されて、後目大成を見た。しかし、私は先生の門に入る前に、先ず自然主義の文学に接して、所謂自然主義の洗礼を受けていた。それがために、文学上の意見では、どうしても先生とは反りの合わない所があつて、何か云えば、すぐに遣つ附けられ遣つ附けられしたものだ。私よりも夏目先生に近づくことの薄かつた生田君は、一層その感か深かつたに相違ない。従つて生田君が夏目先生に對して前に挙げたような見解を持つたのも、同君としては尤もな次第である。私が初めて向陵のクローバーたかやまちよぎゅう生える校庭で文学を語り合つた時分の彼は、先輩高山樗牛たかやまちよぎゅうに傾倒して、氣を負うた、

意気軒昂たる青年であつた。樗牛に傾倒したという、その事自体からして、後に先生とどうも調子のうまく合わなかつた所以が自ずから説明されよう。一体、漱石先生という人は、最初は自分の持つて生れた才分を余りよく自覚しなかつた人である。それが他人から勧められるままに、試みに書いてみたものが意外に世間から持て囃はやされる。それでもう一つ書く。それが又一層大きな反響を生ずるといつたように、世間と相俟ち相砥礪しれいして、終にあの大成した人のように私には思われる。そこへ行くと、樗牛は最初から自分に与えられた天分を自覚していた。そして、縦よしやそれが間違っていたにもせよ、又は間違っていたになかつたにもせよ、とにかくその自覚の上に立つて、初めから天下に教えるような態度で読者に臨んだ。それが漱石先生には氣に入らなかつたのである。次代の樗牛を以て自ら任じていた生田君が、漱石先生とうまく反

りが合わなかったのも当然ではあるまいか。

こうは云うものの、私交に於ては、夏目先生は決して生田君を容れられなかったわけではない。生田君も亦先生の蘊蓄と温情とは十分に認識していた。同君の生涯に於ける一ばん大きな業績とも云うべき『ニイチエ全集』の翻訳に於ても、最初『ツアラツストラ』を訳出する際には、先生を好い相談役にして、半ば先生の庇護によつて訳出したものである。

が、そんな事よりも、私は生田君の「青年は叱るよりも煽てる方が大切だ、その長所を助長して行けば、欠点は自ずから隠れる」と云つた、その老成な意見に感服した。感服したればこそ、三十年後の今日なお記憶しているような次第である。

それかあらぬか、生田君はその後紀州へ講演旅行をした序に、佐藤春夫君を見出して、それを東京へ引張り出して来た。生田春

月君を育成したのも同君であつた。雑誌『芸苑』を出した当時、上田先生も馬場先生も次第に手を引かれるし、私などが飽きてしまつた後でも、生田君は一人踏み留まつて、永い間後進を相手にあの雑誌をつづけていた。そして、その間に三木露風君が生れた。まあ一人でお山の大将になつてゐることが好きだ、と悪く云つてしまえばそれ迄だが、とにかく生田君は後進を指導することが好きであつた。第一、若い者と話しをすることが大好きで、相手になつて倦むことを知らない。これが私なぞの到底真似の出来ない所であつた。私とあまり往来しなくなつてからも、島田清次郎君、杉山平助君なども、やはり生田君の門に出入した人々だと聞く。そんな事を云えば、第一私自身からして、生田君に煽てられて、今日(?)ある一人であるかも知れない。私が文学に志したのは、必ずしも生田君を俟つて初めてというわけでもないが、ともかく、

一高時代校庭のクローバーの上に寝そべりながら、共に文学を語り合つたことが、どの位私の文学上の自信を強め、故人に対して忘れ得ない記憶を残しているか知れない。

いずれにしても、生田君は青年を煽ると云つて悪ければ、他人の長所を認めてそれを奨励することが巧うまかつた。巧いだけに好きでもあつた。実際、それは自分のことのように、吾を忘れて他人の長所を挙げ、他人の美点を称揚した。同時に彼自らもそれに酔つていた。他人を持ち上げると共に、実は自分自身をも持ち上げて自分で自分の言葉に酔つていたのである。その点に就いては、私はよく彼をツルゲーネフのルーデインに比較した。「君はルーデインだよ」と云うと、「いや、僕はルーデインのような、言葉ばかりで、生涯何事もなし得ない人間ではない」と否定してはいたが。

聞けば晩年に及んでも、やはり「俺は若い者が好きだ。若い者には、どんな馬鹿な奴にもローマンスがある、ローマンティックな気持がある。老人にはそれが無いから苦手だ」と云っていたそう。いかにも生田君らしい言葉である。

二

明治四十一年三月末の某日であつたと思う、塩原の奥、尾花峠の雪の中から掘り出された私は、亡友生田長江に連れられて、黒磯尻から汽車に乗って上野へ着いたが、相手の女史は母親と共にそこから直ちに自宅へ引取るし、又私は生田君と一緒に早稲田の夏目先生のお宅へ落ち着いた。先生は快く——と云っては悪いかも知れない。とにかく、悪い顔は見せずに、私を引取って下さつ

た。私はそれから初めて、自分達のことを大々的に報道された新聞の記事を見た。が、それを見ても、別段自分達が社会からシャット・アウトされたというような痛傷いたでは感じない。それよりももっと別な関心事が私の心を一杯に占めていた。随分横着な話だが、大概の当事者はそんなものであるうし、特に私がそうであったかも知れない。

処で、その翌日のことであつたと思うが、又生田君がやって来て「今日飯田町の教会の文芸講演会では、特に予定を変じて、二人のために弁ずという演題の下に、大いに君達のために弁じて来た」と、さも得意らしく報告していた。生田君も当時は若かつたし、それに演壇から降りて来たばかりで、気が立だいこつていたから、今日君達を弁護するだけの勇氣のあるものは乃公一人だというような意味のことを匂わせたようでもある。で、同君が帰った後、

私は先生に向つて、「どうも他人の弁護をするということが、それ程勇気を要することとも思われない。別に叛逆人の弁護をするわけでもなからうから」というような意味の不平を漏らした。すると、先生は「いや、そんな事よりも、もし彼にそれだけの勇気と親切があるなら、自分で君を引取つて世話をするのが当り前だ」と云われた。私は肅然として黙つてしまった。当時の私はもはや他人のことを彼れ此れ云う資格はなかつたのである。が、今にして生田君のために弁ずれば、同君も恐らく先生のこととは別にしてお考えていたのであろう。それでなければ、あんな事を云う筈はない。

どうも先生という人は、不断は私どもの仲間に対しても、大所高所から見下ろして批判していられたが、時とすると急に降りて来て、一緒になつて優劣を論じられることがあつた。字だの、画

だの、俳句だのの話になると、特にそうであった。そこが又懐かしい所でもあった。

誰が一番愛されていたか

記者を玄関へ送り出して、二階の書齋へ戻ろうとすると、隣の部屋から細君が声を懸けた。

「また漱石先生の想い出のようですね？」

「うむ」

私はそれ以上云う気になれなかった。世間ではもう私が漱石先生のこと以外に、何にも書くことがないように思っているらしい。漱石先生のことと云えば、屹度私の許へ持込んで来られる——ならしいのだが、私の許へ持込まれる原稿と云えば、屹度きつと漱石先生のことだ。これは私に取ってはいくらか淋しい。この心持を老妻も知っているのだ。

しかし、漱石先生に就いて書けと云われては、私はやつぱり書かすにはいられない。だから、一言と云わず引請けた。が、引請けたからには、何か新鮮味のあることを書きたい。ただ従来あまりたびたび書いたので、何を書いて、何を書かずに置いたか、殆ど記憶していないような始末である。仕方がないから、現在の心境に照して、私自身に一番新鮮味のあることから書く。

先生の門下生——この言葉も私どもから云い出したのでない、世間で附けた名前だが、暫く便宜のために藉りて置く——その門下生の間には、故人寺田寅彦さんのように、先生の方からも一種の尊敬と愛情を交えた感情で遇されていた方もあったが、それは別として、先生の盛時——つまり先生の創作熱が一番昂揚していた時代に、最も深く——と云って悪ければ、最も近く先生に接近していたものは、何と云っても小宮豊隆君と、三年前に死んだ鈴

木三重吉君と、それから私とであつた。では、この三人男の中で、誰が一番故先生に愛されていたか。云い換えれば、誰が一番先生の胸奥に接近していたか。

それに対して、私は躊躇なく「それは小宮豊隆だ」と答えたい。この事は、既に先生の生前からして、豊隆自らそう思っていたばかりでなく、岡目から見てもそうであつた。そして、今日と雖も恐らく小宮君はそう思っていることであろう。三重吉は、自分自身本当に先生から一番愛されていると信じていたかどうかは分らないが、側はたの者に対しては、恰も自分が先生から特別の愛顧を蒙っている——彼自身の言葉を藉りて云えば、「先生の牽丸を握っている」ように振舞っていた。(どうも婦人雑誌でこういう野卑な言葉を使つては甚だ相済まぬが、こう云わぬと三重吉が浮んで来ないのだから仕方がない。)しかも、三重吉の愛すべき点は、

側の者に対してそう云うばかりでなく、先生自身の前でもそういうように振舞っていた。そして、先生は又それを許していられたのである。処で、私はどうかと云うと、この二人の持っているような自信や気持は、残念ながら、私には少しもなかった。こう云うと、小宮君は鸚鵡返しに云うでしよう、「嘘を吐け！ 君だつて自分が先生から一番愛されていると思つていたに相違ない」と。「云うでしよう」ではない、実はこの言葉は小宮君から屢々聞かされた言葉である。そして、この言葉は、表面私を遣つ附けているようで、その裏には少からず私の心に媚びるものがあつた。だから私は、そう云われるたびに、にやにやしながら沈黙するのを常とした。沈黙はするが、腹の中では必ずしも甘んじて小宮君の言葉に同ずることは出来なかつた。それ程思い上る気には、私にはどうしてもなれないのだ。

實際、小宮君の云う通り、私達ばかりでない、苟くわしんも漱石門に出入した人々は、いずれも自分が一番先生から愛され、信賴されてい
ると思つていたに相違ない。例え、やや後れて出入するようになつた林原未井君はやしばらみせい然り内田百閒君うちだひやくけん然りである。殊に先生の歿年一
二年前から出入し始めた故人芥川龍之介君、久米正雄君などは、
自分達こそ本当に漱石を愛し漱石を理解している、そして漱石か
らも理解され愛されているという強い自信を持っていた——これ
も恐らく小宮君の言う通りであろう。つまり先生の方から云えば、
漱石という人は、自分の許へ来るものには、誰にでもそういう感
じを抱かせるような一種の魅力——人格の温みを持った人であつ
ただけは、私もここに断言することを憚らない。なればこそ、
一たび先生に接した人々は、誰も彼も自分が一番先生に愛されて
いる——極言すれば、先生は自分一人のものだという感じを抱く

ようになるのであろう。が、私だけは例外だ。

そりゃ私だって先生を自分一人のものだと思いたかった。が、目の前に小宮君や三重吉を置いては、どうしても二人を差措いて、私がそういう自信を持つわけに行かなかった。一つは私の性質にもよろう、境遇の影響もある。が、そんな詮索は別として、ただ私は誰よりも一番先生に迷惑を懸けた、世間的、社会的並びに物質上の迷惑を懸けた。これは自信ではない、事実である。客観的な事実である。で、もし聖書の中のある「帰宅した放蕩息子」の例をここに引用してよいということになれば——旧約の中のある話は、さんざ親に迷惑を懸けて家を飛び出した道楽息子が、数年の後又裏ぶれて戻って来た。すると、老いたる父親は、怒ってそれを追い出すかと思いの外、直ちに家へ上げて、下へも置かず待遇するばかりか、三人の兄弟の中で一番多くの財産を頒^{わか}ち与え

ようとする。これを見ては、始終家に在って、父を助けて勤勉に働いていた二人の弟が納まらない。何故そんな事をするかと詰問すると、「親に取っては片輪の子が一番可愛いのだ」と答えたというようなことであつたと思うが——こんな話を適用していいとすれば、私が一番先生に愛されていたということにもなる。しかし先生は私の恩師ではあつても、生みの親ではない。漱石先生の生前、先生に対してそういう感じを持つ程、私も先生に対して狎れてはいなかつた。だが、先生の歿後二十余年を経た今日ではどうであらう。今日私が先生——私の胸奥に生きていられる先生、実際の先生ではない、私が勝手に創つた先生に対して、こういう感じを抱いたとすれば、つまり生みの親が道楽息子に対して持つ感情——これは凡てを宥す神の宏大な愛を象徴したものだと思つが——を先生に押附けたとすれば、それは果して故先生に対する

冒瀆ぼうとくとなるであろうか。

こんな気持になって、不図先生の遺愛の書ポール・ブルジェーの『家名の重圧』を開いて見ると、次のような文句にアンダラインがしてある。いわく、

「人間が本当に寛大宏量になるためには、先ず馬鹿になる修業をしてからでなければならぬ」と。

私は慄然として冷汗が背を流れるのを覚えた。そして、その書を元の所に納めて、そこそこに先生の書齋を出た。